

# 過去（伝統武術）と現在（現代武術）における中国武術の違い —中国武術の効果における変化の背景を考える—

張 成忠\*, 小野昌子\*\*

## I. 緒言

現在中国において中国武術は、「護身」、「頑健な体づくり」、「身体的動作による芸術的表現」という<sup>3)</sup>三大効果があることが認められている。今日、この三大効果におけるそれぞれの割合は、以前と大きく変化しているようである。過去、武術の鍛錬者が求めていた最大の効果といえば「護身」面であったが、現在の鍛錬者、例えば、武術套路（型）競技に参加する選手が求めているのは「芸術的表現」が主であり、朝、公園等で太極拳を練習している愛好者たちは、レクリエーションの一貫として「頑健な体づくり」が主となり、「護身」の意義は薄れ二次的になっているように思われる。このように中国武術について鍛錬者や愛好者が求める効果の割合が変化したことは、当然のことながら時代が異なっており、時を経て人々の思想が変化してきたことが原因であろうと思われる。

そこで、今日における中国武術（現代武術）の三大効果に対してはどのように認識されており、過去（伝統武術）といかなる違いが生じているのか、また、その効果に別の意義があるのかを知ることにより、中国武術が現代社会にいかなる効果をもたらしているのかを明らかにできるものと考えられる。さらに、本研究では伝統武術と現代武術の効果の比較をして、なぜ中国武術における効果が変化してきたのかについて歴史的考察をして、その点について解明することを目的とした。

## II. 方法

2004年10月に中国河南省鄭州にて開かれた第1回世界伝統武術フェスティバル学術論文報告会において、54名の中国武術学者に対し質問紙

による調査（4項目）を行い、今日における中国武術の三大効果に対する認識度を調査した。調査は、質問紙によるものと面談による調査を行った。60部配布、54部回収、回収率90%であった。

質問紙による調査は、過去における武術（以下、伝統武術と称す）の効果に対する認識度と現代における主流な武術（以下、現代武術と称す）の効果に対する認識度を集計した。認識度は5段階で示し、「5」は非常に思う、「4」は比較的思う、「3」は普通、「2」はあまり思わない、「1」は思わないとした（表1参照）。

## III. 結果

伝統武術の効果に対する認識度について、「武術の護身面」を挙げた人の割合が最も高く75.9%であった。次いで「強い体づくり」46.3%、「レクリエーションや芸術的表現」35.2%であった。その他「武術の哲学性」59.3%、「武術の道德面」59.3%、「武術の素朴な自然性」44.4%であった。「武術の護身面」を挙げた人の割合が最も高かったが、「強い体づくり」「レクリエーションや芸術的表現」を挙げた人の割合はそれに比べて低かった。「武術の哲学性」「武術の道德面」を挙げる人の割合は高かった。

現代武術の効果に対する認識度について、「強い体づくり」を挙げた人の割合が最も高く60%、次いで「レクリエーションや芸術的表現」42.6%で、「武術の護身面」を挙げた人は31.5%であった。その他「武術の競技性」42.6%、「武術の身体能力面」35.2%であった。「強い体づくり」を挙げた人の割合が、伝統武術の効果に対する認識度に比べて高く、逆に「武術の護身面」は大幅に低くなっている。また、「レクリ

\* 愛知大学・中央大学・名古屋大学非常勤講師

\*\* 愛知県立芸術大学・日本福祉大学非常勤講師

表1. 中国武術学者を対象として用いた「中国武術の効果における認識度」アンケート用紙  
(中文を日本語訳した)

中国武術の効果における認識度	
	男・女
5非常に思う、4比較的思う、3普通、2あまり思わない、1思わない	
例：武術の護身面（実践性） 5, ④, 3, 2, 1	
I. あなたが考える伝統武術の効果は何ですか？	
（あなたが認識する程度を数字で示して下さい）	
1. 武術の護身面（実践性）	5, 4, 3, 2, 1
2. 武術の頑健な体づくり（健康増進）	5, 4, 3, 2, 1
3. 武術の芸術的表現・レクリエーション性	5, 4, 3, 2, 1
4. その他（以上の3題以外にあなたが考える他の	5, 4, 3, 2, 1
効果があれば記入して、また認識度を示して下さい）	
II. あなたが考える現代武術の効果は何ですか？	
（あなたが認識する程度を数字で示して下さい）	
1. 武術の護身面（実践性）	5, 4, 3, 2, 1
2. 武術の頑健な体づくり（健康増進）	5, 4, 3, 2, 1
3. 武術の芸術的表現・レクリエーション性	5, 4, 3, 2, 1
4. その他（以上の3題以外にあなたが考える他の	5, 4, 3, 2, 1
効果があれば記入して、また認識度を示して下さい）	

ーションや芸術的表現」の認識度の割合は高く、その他「武術の競技性」「武術の身体能力面」を挙げる人の割合は非常に高かった。

また、今回の面談においても、多くの中国武術学者が中国武術における哲学思想や道徳観、武術には全面的な身体的基礎体力が必要であることなどについて、高い認識をもっていることがわかった。

#### IV. 考察

##### 1. 伝統武術について

###### (1) 護身の形態

中国伝統武術といえば軍事武術と民間武術に分けられる。その昔、人間と野獣との格闘が武術の芽生えであった<sup>5)</sup>。その後、人間間の部落戦争へと発展し、国と国との戦いが始まった。自分が生きるか死ぬかという武闘の中で相手に

打ち勝つために、人々は武器の重要な役割を認識し始めた。特に銅や鉄の出現によって武器はより優れ鋭利になっただけでなく、豊富多才な形態の武器が存在した。例えば劈（振り下ろす）、刺す武器である剣・刀・槍；たたき切る、たたき割る武器である斧・金槌；縄状の武器（相手の武器に巻きつけて身動きできないようにする）である流星錘・九節鞭などである。

さらには、人々は戦場において優れた武器を持つ以外に、攻防技術の良し悪しが相手を死に追いやるかどうかの要因となることを認識した。人間は最初は本能で野獣と闘っていたが、その後、目的を持ち、準備をし、意識的に相手を攻めるようになり、最終的には相手のどの部位を攻め、自己のどの急所を守るのか、また格闘の過程でフェイントを用いたりするなど、格闘には知恵が必要であることを裏付けていっ

た。知恵、勇気、技術が増大した格闘は残酷化、激烈化して中国武術の原形が形成されていた。

国を守るため軍隊が出現し、その中で格闘経験者が武術教官となった。兵士の日常の任務は厳しい攻防技術の訓練を受け、必要であれば出陣して敵と戦うことであり、これが軍事武術であった。その後、軍人が復員して帰郷すると、軍事武術が民間へともたらされていった。こうして民間では軍事武術が継承されたが、軍隊での格闘形式を完全に行うことは不可能であった。軍隊における格闘の多くは集団による作戦で、使用する武器は精良であり、一方、民間では個人による格闘が多く、また武器の携帯も難しかったため、徒手（素手）による格闘技術によって攻撃、急所を突くことが民間武術の主要な形式として形成されていった。それは軍隊における大胆な破壊、迅速で強大、武器を持つとは異なるが、軍事武術の命をかけた戦い、あるいは民間武術の格闘であろうと、共に自己防衛と相手に打ち勝つという枢軸は同じであり、この点では共通の目的を有している。その後、軍事武術と民間武術は各々が取り巻く環境の中で、それぞれの需要に基づいて発展しつつ、互いの長所を引き立て、また短所を補いながら、中国武術における格闘わざの特徴をさらに豊かにして現代に継承された。

## (2) 護身の背景

本研究のアンケート調査結果からみると、伝統武術における効果は「武術の護身面」の比率が最も高かった。このことは、過去人々が武術を鍛練する最大の目的が「護身」のためであったことによると考えられる。例えば《紀効新書》においても「既得芸、必試敵」（武術を学ぶ限り、護身術を学ぶべし）<sup>4)</sup>と示しており、これは伝統武術の主要な効果を示す証拠であろう。事実、このような強い自己防衛の意識は、過去中国において頻繁に起こった戦争と密接な関わりをもっている。その昔、統治者は軟弱無能であったため、勇猛な遊牧民族に絶えず中原を侵入され、中国北方人民の生命と財産は

常に脅かされていた。北方の人々は自分たちの土地を守るために敵との粘り強い戦いを強いられた。過去、冷兵器（火薬を用いない）時代においては、自己防衛の強さ自体が相手に打ち勝つ要であり、凶暴な遊牧民族に勝つには、確かな防衛能力を備えていることが不可欠であった。したがって《中国武術史》にも「東京（河南）、河北一帯は昔から民間で武術を鍛練している」<sup>3)</sup>と記載されているように、中国北方は歴史的な背景により武術は必須のもので、護身面は人々から重要視されていたことは道理になっており、これが中国北方において武術の鍛練が盛んに行われた主な原因であろう。過去において、いわゆる武術とは、護身効果があつてこそ「武術」と称することができた。

伝統武術の「武術の護身面」の認識度が高かったのは、中国史の中で戦争における武術の存在が極めて重要な役割を担っていたためであろう。とりわけ中国北方の労働者たちは敵との戦いの中で尚武の気風を形成したため、その後、中国北方で多くの武術名家が次々と生まれ、武術は北方漢民族の大切な戦闘武器となった。

## (3) 護身面における活躍

中国封建社会末期になると、中国清朝（満州族）の統治者の腐敗と外からの侵略により、社会は極めて不安定な状況におかれていたため、中国では空前の武術ブームが巻き起こっていた。人々は次々と刀や槍等の武器を手にし、外からの侵略に抵抗し反撃するため、更には腐敗した封建統治者との闘いのため武術に励んだ。太平天国、白蓮教、義和団等の組織は武術鍛練の名のもとに結社、侵略に反対し、抑圧に反抗することを目的としていた。統治者による武術禁止令から逃れるため、人々は夜間に寄り集まって稽古に励み、早朝解散した<sup>2)</sup>。当時の武術鍛練の目的は非常に明らかなものだった。その後、武術に励んだ群集は敵との戦いの中で、透徹した技でもっておびただしい敵を死に至らしめた。この農民らの中には敵でさえも認める武術に長けた者がいた。また巧みな武芸を持つ女性もいたため、彼らは非常にあしらいにくく、

なかなか攻め落とせられなかった。こうした農民たちの武芸や勇氣は敵に強い打撃を与えていた。この時代は、中国の肉体労働者にとって最も厳しい苦難の時期であり、外からの侵略と統治者による抑圧を受けていたため、これらの苦難から逃避し生き長らえるために敵との戦いを余儀なく強いられたのである。以上が、当時群集が武術鍛練を活気づけた原因の一つであろう。

## 2. 現代武術について

### (1) 強く健康な体づくりの効果

冷兵器（刀・剣・槍・棍）が戦場から退いた後、伝統武術の護身効果は国と家を守る要の武器ではなくなったが、武術がもたらした頑健な身体づくり、意思を頑強にさせる等の効果はますます顕著になり、これらの価値は人々に認められ浸透していった。今回の調査によると、中国武術学者らは、現代武術については「体を頑健にさせる」効果を認識し、また、「護身」中心であった伝統武術は、過去においては絶対的な優位を占めていたと認識している。今日では体を頑健にさせる現代武術が主導の地位を築いているが、この変化は武術がスポーツ化されたことを意味している。

スポーツ競技武術は、体操競技の採点法を参考に1959年より採用され40年余りの歴史がある。規範の改善を続けながら、今日の競技武術は系統的な規定を形成させた。もともと素朴で護身動作であった武術が象徴的な華麗さを備えた動作へと移り変わり、更には動作の難度にも大きな変化をもたらした。例えば、跳躍技の一つ「騰空旋子」は元来跳躍のみであったのが、360°のひねりを加えたり、近年では720°ものひねりへ発展しているように、動作難度の技術面における要求が高くなるにつれ、優れた身体能力を備えていることが必然となってきた。このように、昨今の武術競技は、跳躍・バランス・スピード・柔軟性等、動作難度が増し、要求が厳しくなっていることが大きな特徴である<sup>7) 8)</sup>。

### (2) 頑健な身体づくりにおける効果の形成

過去、護身のための武術鍛練において、人々は、鍛練することにより体と精神を頑強にできると認識していた。中国封建時代末期、貧困にあえぐ肉体労働者たちは、貧困による虚弱な体質や疾病から脱却しようと、武術によって体を鍛練し体力増強を図っていた。太極拳の出現や太極拳の“詳推用意終何在？益寿延年不老春”<sup>6)</sup>（太極拳を行う最終的な目的は、やはり健康と長寿のためである）などの名言は健康に対する渴望から生まれたものである。

強靱な体づくりと護身というものは同列には論じることはできない。冷兵器が戦場から退く前は、武術の戦争における役割は大きなものであった。火薬の誕生により冷兵器が消失すると、武術は頑強な体づくりの運動として、多くの人々に重視されたが、太極拳はその一例である。中国封建社会末期、太極拳は高級な健康運動として、貴族階級に広まっていた。貴族の生活は恵まれ、その上儒道家思想の影響を受けて「静」を好み「動」を嫌っていたため、運動不足を引き起こして体は肥満になり、虚弱で病気がちであった。

太極拳動作は緩慢で激しくなく、貴族たち「静」を好むという現状に適したため、太極拳は貴族間で大きく広まっていった。このように中国武術の一種である太極拳の健康効果は早くから人々に認識されていたが、ただ社会において完全に普及されることはなく、また社会の動乱によって一般大衆には接する機会がなかった。毛沢東の時代に入り、1956年、国民の健康を願い中国政府の呼び掛けで、武術専門家による入門の太極拳「簡化24式太極拳」や初級長拳等の武術種目の編成を行い、中国全土の普及に努めたことにより、一般大衆が太極拳や長拳などを学ぶ機会を得ることが出来るようになった。

昨今、太極拳の普及は目覚ましく、中国では朝、公園等で人々が太極拳を行う情景を至るところで目にすることができる。また、夕方、体育館や広場では青少年が強い心身づくりのために長拳を練習する光景が見られる。

### (3) 頑健な身体づくりが及ぼす文弱気風に対する変化

中国では古来より、文を重んじ武を軽んじる思想が根強く、春秋戦国時代より文武はそれぞれ異なる道を歩み始めた。儒家と道家の二派は文を重んじ武を軽んじ、静を唱え動を抑え、一貫して中国思想の主導の地位を築いていた<sup>1)</sup>。文を重んじるための基礎が定められ、宋朝以後、更に盛んになると、人々は読書にふけるばかりで、身体と意志はますます弱くなっていった。

文武に通じている者の数は極少数であり、絶対多数は「文」のみで「武」には長じていないものだ。文人の地位をあげ導ぶ歴史は、数千年間中国人に感化作用を及ぼしており、文人は武術を行わず、武人は文化的でならず、文人は弱く荒波にもまれない局面が形成された。現代に至り、文人の目には依然、武術を軽蔑する古い思想が存在してはいるが少数であり、大多数の文人は頑健な心身づくりの重要性を意識しており、これは国家や個人、仕事面において極めて重要なことであると思われる。

文弱は身体を弱め容易に虐げられ、時には国家さえも操られることさえある。その昔、遊牧民族は中国辺境をしたが放題に侵犯し、中国統治階級は抵抗する力もなかったが、歴史の中でも重文軽武の弊害が間接的に証明されている。今回の調査では、中国武術研究学者は現代武術における効果を高く認識しているが、これは文人であっても「文」のみを重んじ「武」を大切にしないという意識から変化してきたことを表わしていると思われる。

### V. 結論

自己防衛を最大の効果とする伝統武術は、冷兵器の消失から火薬兵器の出現により、戦争の舞台から退いていくと、その護身効果も二の次になっていった。相反して、その頑健な体づくりにおける価値は主流を占めていった。過去における伝統武術の自己防衛力が主導な地位を占めていたのは歴史的な需要であったが、現代武術の強い体づくりが首位を占めているのは当代の必然性である。いかなる事柄も時代の要求によって変化するもので、中国武術の効果における割合の変化や強い体づくりが主流を占める事実も時代の産物といえる。

### 《参考文献》

- 1) 谷世権, 中国体育史, 北京体育大学出版社, 2003, p53
- 2) 国家体育委員会武術研究院, 中国武術史, 人民体育出版社, 1997, p305
- 3) 林伯原, 中国武術史, 五洲出版社, 1996, p 1, 211, 213, 281, 400, 437
- 4) 戚繼光(明代), 紀効新書, 人民体育出版社, 1988, p308
- 5) 全国体育院校教材委員会, 武術理論基礎, 人民体育出版社, 1997
- 6) 人民体育出版社編, 太極拳全書, 人民体育出版社, 1988, p653
- 7) 上海体育学院学報編輯部, 上海体育学院学報《第26卷、武術論文集》, 上海体育学院, 2002, p89, 90
- 8) 張成忠, 中国武術「長拳」の特徴と変遷《武道学研究第34卷第2号》, 日本武道学会, 2001, p47

